

構築主義的アプローチと勢力均衡

2009/11/6

辻本 哲平

I)はじめに

WW1、WW2、冷戦、エスニシティによる紛争、世界政治経済のグローバル化など、国際政治、経済、社会、文化面で19～21世紀にかけて世界はあらゆる激変を体験することとなった。よって、国際関係論の分野でも従来の国際社会認識の枠組みを超えて国家主体以外のアクターの役割や関係に焦点を当てた国際関係の現実を説明しようと、様々な国際社会イメージ（理論）が構築されてきた。そこで、今回私はその中の構築主義の概念を主にとりあげつつリアリズムとリベラリズムについても触れていくこととした。本勉強会ではそれぞれの概念の定義を述べ、そのあと、構築主義的立場から考えた現実世界の秩序立てについて私見を述べさせていただき、おわりに全体としてのまとめを述べる。

II)構築主義とは

人文社会学一般では広く受け入れられていた社会構築主義（哲学の構造主義と基本理論は同じである）が国際関係論の領域に踏み込んだものである。どちらかといえば理論というよりアプローチである。

具体的には・・・

例1) 日本にとってのアメリカの核と北朝鮮の核

例2) 冷戦の終焉

III)リアリズム

IV)リベラリズム

この二つの概念は国際政治における対立と協調のどちらに力点を置くかの違いはあれど、①)国際社会はアナーキー性を前提②)国家を合理的アクターとして捉えている③)それらのパラダイムが国家や時代を超えて「普遍的」に共通するという考えをしている点で共通点を持つ。

そしてこの二つの③)の理由、つまり本質主義や客観主義を批判してできたのが上記の構築主義である。

V)私見

国際秩序を保つにはどうすればいいか



私は勢力均衡政策の時代遅れ論や国際法や国際道義、それを体現する代表としての国際連合による世界平和、世界格差是正への運動の現実性自体に懐疑的にならざるを得ない。

理由

① 民主主義国家以外の存在

② テロリズム

③ EU と ASEAN

④ 国家以外のアクターの脆弱性

ここから、勢力均衡の理論によって逆説的に現実的な国際社会の平和を実現できると考える。

VI)終わりに

ここまで国際社会の根底に流れている理論を考えてきた。リアリズムもリベラリズム、

この二つとも理念型であり現実の姿とは異なるが、あらゆる国家間の関係をリアリズム⇔リベラリズムの直線上で捉えられる。よって今回はとりあげなかったが、今後は国家以外のアクターが関わった国際問題や外交問題、国家間の新しい取り組みや現象について今までの理念で説明できるのか、または新しい理論の構築が必要なのかなど、理論と実際の国際問題の関係について考察していきたい。

<参考文献>

高田 和夫編 「新時代の国際関係論」2007 法律文化社

中島 嶺雄著 「国際関係論」2008 中公新書

岡 義武著 「国際政治史」2009 岩波書店